

# ビジネス フォーカス

【マテリアル】  
【再生資源の有効活用】

蓄電池）などの使用済み製品である。これらの「リサイクル材料」はレアメタルからレアメタルへ、あるいはPETボトルからPETボトルに使用することができるため、資源の乏しい日本にとって非常に貴重かつ有効な原材料となる。

これらの使用済み製品が「リサイクル材料」たるゆえんは、日本国内におけるリサイクルシステムがあればこそだ。

日本は資源に乏しい。日本人であれば誰もが知っている「常識」である。しかし、最近ではメンハイトやジエット燃料用のミドリムシなど、エネルギー資源として期待されるスマテリアルが日本発として登場しつつあり、その常識が覆る日が来るかもしれない。

そうした新たな原材料以外にも、有効活用できる資源がある。レアメタル原料の宝庫である使用済み電子機器内のプリント基板といった「都市鉱石」や廃PETボトル、廃バッテリー（鉛）と過去最高を記録した。これは

PETボトル販売量に対する回収量の比率である。

これがほぼ全量、日本国内におけるPETリサイクル原料として再活用されれば、日本のPETボトルリサイクルは持続可能な循環型システムといえる。だが現状は、大半が中国にPETくずとして輸出されている。PETボトルリサイクル推進協議会によると、指定PETボトル回収量のうち約6割が輸出されている計算となる。

日本の使用済みPETボトルは品質が高いため、中国でもリサイクル原料として活用されている。協議会が発表した12年度のリサイクル率は、中国での活用を考慮して85・0%と高い値になっている。だがPETボトルリサイクルが国内循環型の「ループ」ではなく、過半が中国に流れる「フロー」となるため、原料となる「資源」を調達できない国内の再生原料メーカーには死活問題となっている。

リサイクルを手がける協栄産業は、PETくず輸出について、本来であれば国内で創出されたはずの付加価値や雇用機会まで外へ流れ出ていると指摘している。同社は国内で初めて、従来のケミカル処理とは異なる手法で品質安全性を確保した、再生PET樹脂の量産企業として知られる。

使用者の環境意識の高さや業界関係者の熱意により、これらは、原料となる「資源」を調達できない国内の再生原料メーカーには死活問題となっている。リサイクルを手がける協栄産業は、PETくず輸出について、本来であれば国内で創出されたはずの付加価値や雇用機会まで外へ流れ出ていると指摘している。同社は国内で初めて、従来のケミカル処理とは異なる手法で品質安全性を確保した、再生PET樹脂の量産企業として知られる。

（矢野経済研究所  
素材産業グループ）

主席研究員相原 光一